

令和6年度農業後継者特別支援事業

事業主体名 鹿児島県立農業大学校農学部野菜科

1 目的

近年、地球温暖化の影響により、抑制かぼちゃでは従来の種期では雌花の着生が不安定となっている。そこで、雌花の着生が安定するは種時期の検討を行う。また、育苗初期（本葉2～3枚期）の育苗温度の違いが雌花着生及び増収効果に影響するか検討を行う。



2 実施状況

(1)冷温育苗と育苗日数

植え付けは、冷温育苗を行うことにより、常温育苗より7日遅くなった。

表1 播種日と植付日、および冷温処理による育苗期間の延長

播種	播種日	育苗処理	冷温処理開始日	植付日	育苗日数(日)
1回目	8月22日	常温	—	9月3日	12
		冷温	8月29日	9月10日	19
2回目	9月1日	常温	—	9月17日	16
		冷温	9月8日	9月24日	23

(2)着果節位、収量への効果

着果節位は、常温に比べて「えびす」において冷温で低かったが、「栗五郎」では高かった。冷温処理の着果節位への影響は、判然としなかった。果実重は、常温で3kg、冷温で2.2～2.5kgと冷温処理でやや小さくなる傾向であった。これは、植え付け時期の遅れが影響したものと考えられる。

育苗期間中の冷温処理による着果節位の低下とそれによる収量の安定多収化を考えた。しかし、冷温処理により育苗日数は増加して植付け日が遅くなった。着果節位の低下は判然とせず、収量は低下した。

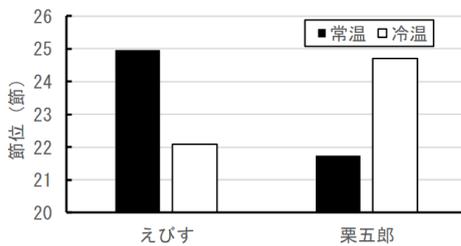


図1 着果節位

調査日：11月8日
調査株数：各区10株

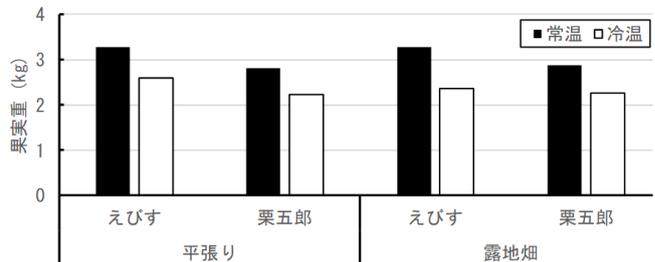


図2 果実重

調査日：12月2日
調査株数：各区10株

3 今後の課題、取り組み

同一播種日で冷温育苗すると、育苗日数が増え、植え付けが遅れる。冷温育苗を一定の移植時期で検討する場合には、育苗日数の増加を考慮して播種期の前進化が必要になる。